想的眞理である。

かくの如きストラウスの見解を一層極端まで押詰めたのはフオイエルバツハである。彼は宗教を單なる人間の心理的迷妄とし、神學を以て『人間論』に過ぎぬとした。その意味は、人間は無意識的な自己の本質を客觀的にし、之と自身とを結び付けて宗教を成立せしめると云ふのである。例へば慈悲が人間によつて切願せられ、價値ありとせらるゝ時に、神は愛なりとの信仰が起る。卽ち神は自己の願求の反射である。而して獨り神の觀念のみならず、一般に宗教的觀念は、凡て人間の願望及び恐怖から成立するものである。

一方に於て斯くの如き唯物論的傾向が勢力を占めんとしつゝありし時に、他方に於ては實證論が英佛の思想界に勢を得て來た。實證論とは事實を基礎とする哲學と云ふ意味で、其の主唱者は言ふまでもなくコムトである。コムトに從へば、吾等が知り得べく、且知るを要するものは、唯だ現象及び現象間の關係だけである。現象の本質、その究竟原因と云ふやうなことは、吾等の知り得るものでなく、又知る必要もない。知識の用は、唯だ現象の關係に就て齊一の法則を發見し、一の事象卽ち原因の生起よりして、他の事象卽ち結果の生起を豫知し、原因に相應する結果を作り、若くは防ぎ、若くは變化せしめ、若くは之に備ふるに在る。學問とはコムトの言を藉れば、豫知するこ

とである。

この思想は、海を超えて英國の精神界を動かし、スペンサーの『不可知論』となつて現はれた。彼に從へば、究極の實在は『不可知のもの』である。科學は唯だ實在の經驗界に於ける狀態を理解するを以て滿足し、之が解釋を宗教に讓らねばならぬ。宗教の永遠の立場は此處に在る。されば宗教は、科學の範圍を犯すことなく、唯だ『不可知者』の信仰に安住し、科學との調停を續けて行かねばならぬとせられた。

九

シユライエルマツヘル及びヘーゲルによつて建てられたる神學の殿堂は、唯物論、實證論によつて種々なる打擊を受け、無宗教的傾向が盛んになつた時に、衰頽せる宗教を恢復し、新しき基礎の上に神學の殿堂を再建せんとしたのはリツチルである。シユライエルマツヘル以後、彼の如く大なる感化を宗教界に與へた神學者はない。

リツチルの根本主張は、宗教を以て、現に活きて働く經驗なりとする點に在る。宗教的經驗とは彼に從へば、罪を赦されて神と和げりとの感情、並に罪の束縛より脫して特別なる道德的能力を得

たる意志を意味する。此の經驗は全く神自身の力によつて起り、其力によつて無力なる吾は力を得、罪に苦しむ感情が神と歸一の喜悅となるのである。吾等が福音書の記事を信ずるは、歴史上の證據ある故にあらで、自己の心内に實驗があるからである。教會は此の經驗ある者の團體であり、且此の經驗を傳へる機關である。されば教會は隱遁處又は避難處にあらで、貴重なる宗教的經驗を廣く且永く傳へる義務を有するものであるが故に、信者は神人の媒介者として、救濟の爲に働くことに拮据するを要する。一身の救ひをのみ希つては決して完き救を得ない。自身と共に他をも救ふことに努めて、始めて眞の救が得られるのである。宗教は知ることでもなく、感ずることでもなく、實に働らくことである。即ち宗教は意志を根本として、其上に成立つものである。從つて救とは神旨を行ふこと、即ち神の意志を吾が意志とすることである。

リツチルは哲學的思索と宗教とを絶緣せしめんとした。尤も或人が『リツチルは哲學を正門より追出して裏門より入れたり』と言へる如く彼自身が既に自己の主張を哲學的に述べて居るが、主義として極力之に反對し、基督教に於ける哲學的思索を以つて悉く希臘人の感化となし、一切の希臘思想を脱却することを以て眞の基督教徒たる須要の條件とした。彼は更に歴史と宗教とを分離し、宗教は現實の經驗なるが故に、過去の事跡を研究する歴史と沒交渉であるとした。彼に從へば、過

去の事柄が如何やうであらうとも、現に神と和らぎ、既に平和を得ることゝは何の關係もないのである。されば宗教的經驗は固より科學とも關係がない。否な、宗教は知識と關係がない。歴史を研究することも、自然を研究することも、人間の知的要求として固より差支ないが、そは何等宗教と關係する所がないと云ふのが、リツチルの意見である。蓋し彼はゲツチンゲン大學に於ける彼の同僚ロツツエの感化によりて、知的判斷と價値判斷とを分ち、哲學、科學を以て物の存在を研究する知的判斷に屬せしめ、宗教、藝術を以て、直接自己の感情に關する價値判斷に屬するものとしたのである。

彼の思想は、少なからぬ缺點を有するにも拘はらす、宗教の根柢を意志の上に置き、且宗教の眞の領分を明かにした點に於て、非常なる貢獻を當時の宗教界に向つて爲した。歐羅巴の宗教界は、彼によつて新たなる刺激を與へられ、之によつて建設的思想を喚起せられた。凡そ今日の宗教家にして積極的又は消極的に、多かれ少なかれ彼れの影響を受けない者はない。

十

今日の歐羅巴思想界に於ては、最早基督教のみが眞の宗教で、其他の總ては僞りの宗教に過ぎぬ

と云ふ樣に考へる人は、殆どない。あつても思想界に勢力がない。從つて、舊約並に新約の宗教のみが神より啓示せられたる宗教で、其他の宗教は其の眞實なることに就て何等の保障をも有せざる自然の宗教であると云ふ風に說く人も、また殆どなくなつた。而して基督教其ものに對する觀念も今や非常なる變化を來たして居る。予は以下最も新しき基督教的信仰を代表する獨逸學者の思想を紹介して、此篇を結ぶことゝする。

第一は救濟觀の變化である。從來の信仰では下の如く教へられた。曰く、人間はアダムが禁斷の果實を食つて以來、根本的に腐敗して居る。人間は自らの力では如何なる善をも爲すことが出來ぬ。如何に全力を擧げて努めればとて、人間は唯だ罪惡と墮落との深淵に落ち行くのみである。而して神の大愛は此の無力なる吾等を救濟し給はんがために、救主として基督を下した。基督は全然吾等と本質を異にせるものであると。この信仰に從へば、一切は人間の罪惡と、神の恩寵との對立の上に立ち、宗教の唯一の中心力は、罪惡の自覺と、救濟の慰藉とに在るのである。

されど今日に於ては、最早かくの如き宗教觀を固持することが不可能になつた。故に今日の進步的神學者は、救濟の福音、赦罪の福音を說くと同時に、基督は決してポーロやルーテルの如く、人間の性質を根本的に墮落して居ることを說かざりしのみならず、人間の道德的精力を策勵して、『斯

くせよ、然らば生命を與へられん』と言へる自力の一面をも高調するに至つた。曰く『彼は好んで罪人や稅吏の間に往つたが、總ての人が罪人や稅吏であるとは言はなかつた。彼は放蕩息子の比喩を說いたが、總ての人が放蕩息子であり、又はある筈だとは言はなかつた、彼はまた天國を距ること遠からぬ人々を知り、福ひなるものとして讃めるに足る人々をも知つて居た。彼の福音は赦罪の福音であつたに相違ない。されどこは彼の說教の一面で、他面には道德的完全の理想を力說して居る』と。

而して救濟觀の變化は、更に救濟者に對する思想の變化を伴つた。基督は神なりと云ふ信條は、從來基督教を受認するシムボルであり、此の信仰の動搖は、卽ち基督教其ものに對する信仰の動搖となつて居るほど重大なものであつた。されど今や耶蘇を以て天上より降臨せるものとし、吾等地上の人間とは全然異なれるものとする信仰は、學者の最早容認せざる所となつた。アドルフ・ハルナツクの如きも、古き基督論の解釋では、基督を神とせずして神人と信じて居たこと、而して神人と云ふのも亦聖書の言葉ではないこと、並に福音記者は決して基督を神と呼び、又は基督の神性に就て語つて居らぬことを明かにした。而して此の信仰と聯關せる父なる神と子なる神との關係、三位の一體等の教義も、自ら第二義のものとせられ、要するに基督は『何人も比肩すべからざる人

生の指導者』として觀ぜられるようになつた。

十一

次には贖罪說が排除されねばならぬ。從來は基督の死は吾等の罪の爲に獻げられたる偉大なる犧牲であつて、身代りの價値と意義とを有するものと信仰されて居た。然るに今や學者は下の如く考ふるに至つた。曰く、自ら作せる罪は、自ら之を贖ふ外に滅罪の途がない。如何なる神も、吾等の爲に之を贖ふことが出來ぬ。そは品物の如く、金さへ出せば誰でも買へるやうなものとは違ふ。而して罪はまた自己又は他人に課せらるゝ刑罰によつて贖はるゝことも出來ぬ。自己の罪惡感情が他人によりて除き去られるやうなことは尙更出來るものでない。罪惡は、之を赦し給ふ吾等の神の自由なる道德的人格的行爲によつてのみ拂拭せらるべきものである。神を以て何等かの仲介や情實に動かされて罪を赦すものゝ如く考ふるは、神の尊嚴を害するものであると。

次には嚴密なる意味に於て奇蹟が否定されるやうになつた。蓋し今日の外面的文明、自然科學、實用工學は、一定の法則に從へる、自然なる、破るべからざる、秩序の認識を根據として立つて居る。吾等は今や一切の出來事は、自然の法則に從へる、規律ある、測度すべきものであると考へて

居る。然るに自然の法則を破りて、神が自然の出來事に干涉すると云ふ信仰は、吾等の生活經驗と、相容れぬものとなつた。多くの人々は奇蹟を以て非常に重大なる意義を有するものとなし、基督敎の信仰が、奇蹟によつて支持されて居るが如く考へて居るけれど、實は信仰が奇蹟を支持して來たので、奇蹟が信仰の基礎となつて居たのではない。今日の信仰では奇蹟は最早支持する必要がなくなつた。固より基督が人の疾病を癒やし、惱める者を助けたる如き行爲は、嚴密なる意味の奇蹟でないから、自ら別箇の問題に屬するが、其の他の異常なる奇蹟は、之れを彼れの生涯より分離し去つて、聊かも彼れの人格に損失を與へぬのみならず、却つて現代人の信仰に適はしくなるのである。かくして自然現象の合法性を無視する奇蹟信仰は、次第に放棄せらるゝに至つた。固より如何なる新しい神學者と雖も、かの物質論者の如く、廣い意味での奇蹟、卽ち人間の精神生活の奇蹟を否定するやうな事はない。たゞ奇怪なる自然的　蹟信仰を斥けるのである。

次には天啓說も亦否定の運命に遭遇した。蓋し現代の世界觀は、啻に自然現象が普遍的法則に從つて居ることを前提とするのみに非ず、精神的生活の發展にも破るべからざる規範と法則とが存在することを前提として居る。卽ち近代思想の根柢には、自然法の觀念と相並んで、歷史的進化と云ふ思想が横はつて居る。この思想は、歷史の進行の間に突如として現出する超自然的事件を承認し

たり、又は自然現象に對立せる神的啓示を承認することを決してせぬのである。人類の歴史の、特殊の一部分に限られた天啓と云ふやうな古き信仰は、決して其儘では受け容れるものでない。

故に今日の新しき思想家は、斯くの如き部分的天啓を棄てゝ、普遍的天啓の思想を主張する。彼等は曰く、一面に於て歴史上の一切の仕事は、悉く人間の仕事である。歴史の孰れの處にも特別なる神の仕事を見ることが出來ぬ。されど他面より見れば、一切は神の仕事である。人間の全歴史は、次第に己れの方に引上げ給ふ神の仕事であると。斯くの如くにして今や從來基督教の根本信仰と思惟せられたるものが、悉く變化せられ又は放棄せられた　然らば基督教は果して何ものを後に殘して居るか。

十二

古き信仰を棄て去つた基督教は、何を以て新たなる信仰の中心とすべきか。此點に關しては學者宗教家の說く所、區々である。さり乍ら大體の傾向としては、專ら基督の人格と福音とを中心として新たなる信仰を復活せしめようとする。

さて基督の福音のうち、最も根本的なるは、全心身を擧げて人格的なる天上の父を信ずることで

ある。されど此父なる神も、最早星辰の衣を纏ひて大空に住まひ、信者を保護する爲に天使を下し、肉眼に見ゆる奇蹟を以て天地の法則を破りつゝ此世を左右する神ではなくなつた。『そは時空の無限に、極小と極大とに潛在し、一切の思想、其前に力を失ふ無限者全能者である。そは自然の鐵則を衣とし、人間の目、見るを得ざる厚き覆面を着け、恐るべき生存競爭裡に、其造れるものを導きて道德的・人格的自由に到達せしむる神である。』

此神は、己れの完き如く、其子も亦完からんことを望む。神旨によれば、善なる行爲は、外面に表はるゝ事業の中に存せずして、唯だ吾等の現前の本務を盡す所にある。基督の福音の吾等に求むる所は、他人の爲に働く生活、人の爲に獻ぐる高貴なる愛、一切の人生に對する偉大にして高尚なる理解、一切の反目嫉視の間に在りて神より與へられたる牢乎たる道德的安心を得ることである。

基督教は今や斯くの如く變化しつゝある。而して今日の神學者・宗教學者にして、若し其の研究の歩を最後まで進めるならば、當然接觸せねばならぬ一大問題は、基督教も亦一の過渡的宗教形式に非ざるかと云ふことである。一切の宗教が進化の過程にある以上、基督教も亦必然更に高き階段に移り行くべきものでなからうか。少くとも之が今日の思想の自然の歸結である。さり乍ら予は淺學寡聞にして未だ西洋の名ある思想家にして、其の議論を此處まで徹底せしめた人を知らぬ。彼等は

一定の距離を飽くまでも自由に進み來りつゝも、最後に至つて常に宗教の究極の發展が基督教に於て遂げられて居るかのやうに說いて、最早や今までの步調を以て其先に踏み出さうとせぬ。されど予は信ず基督教も亦決して絕對の宗教でない。今後は必ずや基督中心の今日の信仰が、更に神中心の信仰となつて、基督教が他の總て宗教と等しく過渡的のものなることが、事實に於て立證される日が來るであらう。

第十八章　教法・教祖・教會

吾等は前諸章に於て、步々宗教發達の階級を登高しつゝ、宗教其者の本質を明かにするに努めた今や成立宗教のうら、至高の發達を遂げたる基督教及び佛教に關する叙述を終りて、吾等が當面の目的は、不完全ながら之を達した。最後に吾等は、宗教全體に對して、總括的把握を得るために、一切の成立宗教の要素をなせる教法、教祖、及び教會に就て略述せねばならぬ。

立場の異なるに從つて宗教は色々に分類せられるが、オーソリテーの所在と云ふ事を標準として成立宗教を觀察すれば、(一)一定の教法をオーソリテーとする宗教、(二)一定の人格をオーソリテーとする宗教、(三)一定の團體をオーソリテーとする宗教の三つに分類して論ずる事が出來る。

一定の教法をオーソリテーとする宗教、卽ち律法的宗教の最も鮮かな例は、婆羅門教、猶太教卽ちモーゼ教、及びゾロアスタア教の三つである。婆羅門教では其教法を總稱して達磨Dharmaと云ひ古の聖者が直接に梵天より聞きて之を記憶せるものと信ぜられ、その達磨を奉ずる事が卽ち宗教の全體であつた。有名なる摩奴法典は此等の達磨の集錄で、其內容は(一)聖智卽ち神に關する知識、

(二)聖智の解釋即ち哲學、(三)正行即ち宗教上の儀禮、(四)政事即ち公法、(五)刑辟即ち民法及び刑法、(六)業果即ち行爲に對する應報として輪同の六章に分たれ、一定の資格あるものゝみが此等の達磨を奉じ得べしとせられて居た。何となれば達磨は梵天より與へられたる神聖な教法なるを以て、資格なき者が之に與かるのは、梵天な瀆す所以だと考へたからである。かくて達磨を守る事は有資格者即ち僧侶に取りては、同時に義務であり且特權でめつた、猶太教に於ては、モーゼがエホバより傳へられたとするトーラーハ Torah が宗教の中心であつた。トーラーハの內容は婆羅門教に於けると同じく、神人の關係、刑罰、奴隷の賣買、家族制度、其他一般に社會的風習に關する規定である(出埃及記第二十章乃至二十三章)。されば猶太教に於ても、正直に律法を守る事が宗教の全體であつて、學者とはトーラーハの知識に富んだ人の事に外ならなかつた。耶蘇が輕んじたパリサイの徒とは、即ち此等のトーラーハ研究者の事であつた。ゾロアスタア教に於ても、ゾロアスタアに示されたと信ぜらるゝダテム Datem が宗教的生活に於けるオーソリテーで、其中には神に關する事及び日常生活に關する規定を說いて居る。而して前二者に於けると同じく、ダテムを奉ずる事がゾロアスタア教徒の唯一の仕事であつた。

教法中心の宗教は、人類の道德的意識の發達に非常なる貢獻をなした。原始宗教に於て、消極的

又は積極的意味に於て、人間の現實の生活を幸福ならしむる方便であつた神々は、今ま教法中心の宗教に於ては、人類の爲に道德的規範を與へ、理想に向つて精進せしむる力となつた。宗教史上に於て最も注意すべき救主出現の豫言的信仰の如きも、律法的宗教が育て上げた鋭き道念によりて喚び起された宗教意識の一表現である。已に述べたる如く、律法的宗教のオーソリテーたる教法は、抽象的に教法として現はれたのではなかつた。嚴密なる歷史的意味に於て何時教法が成立したかは固より不明であるけれど、不明の儘では昔の人の心を滿足せしめなかつた。彼等は皆な自己の奉ずる教法を何人かに歸して居る。印度人は之を摩奴に歸し、猶太人は之をモーゼに歸し、波斯人をゾロアスタアに歸した。總て此等の人々は、極めて古き時代に出現したと信ぜられたる全然神話的、若しくは半神話半歷史的の人格である。人類は此等の人々を通して、奉すべき教法を神より賜はつた。併し乍ら其教法は次第に複雜になり煩鎖になつた。之と同時に道德的意識も發達し且教練せられたかくて一方に於てを教法の一々を嚴守する事が極めて困難となり、他方に於ては自己及び他人の行爲に對して鋭き道德的判斷を下すようになると共に、時代に對する强き不滿を抱くに至つた。されば多くの國々では、太古に神人出でゝ神法を宣揚したが、次第に之が行はれぬ樣になつたと考へて、過去に黃金時代を求めて居た。支那人は三皇五帝の治世に、波斯人はキマの治世に、希伯來人はア

ダム・イヴの時代に夫々理想的生活を抱いたのであつた。

而して此過去に對する追慕と、現實に對する不滿とは、律法的宗教信者の道念を鼓舞して、玆に新たなる强き希望を未來に置くに至らしめた。彼等は人間が次第に墮落して往くと考へると同時にその墮落の極に至れば、神は新しき人を遣はして新しさ紀元を作り給ふ可しと信じて、玆に新人の出現を仰望するやうになつた。之が卽ち豫言的信仰で、婆羅門教に於ては、摩奴時代が終れば第二の摩奴時代を現ぜんと信じ、ゾロアスタア教では、サオシヤントの出現によりて淨光の國來るべしと信じ、猶太教では、メシア出で神の國を將來す可しと信じた。而して斯くの如き信仰が充實した時に當りて、偉大なる宗教的人格が出現すれば、自身も又は他人も、生前又は死後に、此人こそは豫言に應じて現はれたる救主なれと信じ且信ぜらたれる樣になり、玆に一新宗教の祖師となりて、神と代表者卽神人として尊敬せらるゝに至る。

祖師中心の宗教中最も著しいのは、言ふ迄もなく基督教及佛教で、回教及儒教をも此に加へて差支ない。但し前兩者に於て、教祖は直ちに神として崇拜せらるゝに對し、後二者に於ては仲保者として尊敬せらるゝに止まる相違がある。詳しく言へば前者に於ては、萬有の本源たり、宗教の中心たる神は、世界を超越しては居るけれど、一人格の中に神格が、單に一部分でなく其眞髓が、表現

したのが卽ち教祖であると信ずるが故に、教祖は單に尊敬すべきのみならず崇拜せねばならぬ。崇拜する事によりて神の力が吾等に加はり、その救濟に與かり得ると考へられるのである。然るに儒教又は回教に於ては、教祖は飽く迄も人間で、理想的人格として尊敬はするけれど、之に超人的衣粧を加へて崇拜の對象とする事が無い。兎に角孰れにしても、教祖中心の宗教を信奉する人々は、教祖の信行を庶幾し、教祖の如くあらんと云ふ理想に依りて生活するは當然の事である。かくて此宗教に於ては、教祖の人物を研究する事が盛んに行はれる樣になる。佛教に於ける佛身論、基督教に於ける基督論は、兩教に於ける祖師崇拜が、如何に强きかを示す最も善き證據である。

人格中心の宗教は、人格の神秘性を暗示する點に於て極めて注目すべきものである。人てふ現實に對する不滿は、神てふ理想を求める根本の動機であつた。然るに見よ、最も遠くに求めた其理想を、最も近く人間の中に求め得たではないか。此意味に於て宗教は人に出でゝ人に歸りて來た。玆に吾等は人格の無限性と神秘性とに就て快き驚嘆を感ずる。神と人とは、此宗教に於て、是迄に無き新しき關係を生じた。律法的宗教に於て、吾等の裁判官であり教師であつた嚴格なる神は、今や此宗教に於ては、吾等の中に動く生命となり、吾等に靈の生命を與へる父親となつた。固よりかゝる宗教に於て教法が尊ばれないのではない、されど其教法は祖師の教法として尊ばれるので、祖師

に對する信仰と、教法の遵奉とは、不可離のものとなつて來る。

かくて教祖の人物を中心として、教祖の教法ふ守る人々の團體を生じ、此團體の中に教祖の精神宿れりと云ふ信教が生ずれば、茲に團體をオーソリテーとする宗教が出來る。如何なる宗教にも必ず團體がある。始めの宗教に於ては、家族又は部族又は國家が、一面に宗教的團體であつた。併し乍ら社會的團體と獨立せる眞正の宗教的團體は、教祖を以て信仰の中心とし、且教祖のオーソリテーを相承せる人を中心とする團體に於て、始めて見らるべきものである。嚴密なる意味では、斯くの如き宗教的團體にのみ、教會の名を冠すべきもので。其模範的なのは言ふ迄もなくカトリツク教會である。かくて一旦教會が成立すれば、教祖を崇拜する事も、或は之を研究する事も、共に教會所傳の傳說に從て行ひ且信ぜねばならぬ。故に教會は、其祖傳の信仰をドグマとして發表し、其儀式をサクラメントとして營むやうになる。ドグマは信仰を知識に飜譯する必要に迫られて出來たもので、全教會員が信奉すべきものなるは勿論。永遠に亙りて不變不易のものと信ぜられねばならぬ。されど要するにドグマは、信仰の知的飜譯に過ぎないから、教會の與ふる安心、即ち救濟の力を、直ちに表はすものではない。實際に於て宗教的救濟を與へるのは、即ちサクラメントである。されば教會の教ふるドグマには、永遠を貫く知慧が代表せられ、教會の營むサクラメントには、其一事一

物一行一禮の中に、宗教・救濟方が全體的に含まれて居ると考へるのである。教會本位の宗教信者に取りては、宗教とは以上の二つによりて代表せら〳〵教會のオーソリテーに服從する事である。

教會本位の宗教は、吾等の生活に統一と安定とを與へる點に於て、拒み難き價値を有して居る。今日起ちて明日は倒る〳〵潮の女波男波に空しく弄ばる〳〵果敢なき精神生活から來る懷疑や悲哀は、教會の權威に滿足を以て服從し、日夜に其救濟の力を蒙むつて居る人々の、全く與かり知らざる所であらう。たゞ其ドグマが化石、サクラメントが形式化するに及んで、激刺たる吾等の生命を支配する權威を失つて了ふ。ドグマの源泉たる信仰が涸れ、サクラメントの根本たる敬虔が枯れた時に、教會の權威はたゞ吾等の心を拘束する桎梏となる。茲に於て一切の外形を斥けて、宗教の眞本領を發揮せんとする新鮮なる運動が起つて、信仰中心の宗教が高調する樣になつた。宗教改革も此氣運によりて、成就せられた。乍併信仰中心のルーテルの宗教も、幾くもなく形式化して、シュベーネル等の敬虔主義者を喚起した。當時カソリツク教會内に起つたジアンセン派も、同じ心の同じ試みであつた。佛教ではオーソリテーの壓制が殆ど無かつたので、反動的運動は少ないが、南都北嶺の佛教が貴族的、門閥的、現世的になつて勢力を振つた時に、念佛を以て往生の唯一の手段とし、唱名を以て成佛の津梁とする淨土宗日蓮宗の成立を見た。此等の運動が、直接又は間接に刺激した爲

に、既成宗教は其眠りより醒めて新鮮なる精氣を呼吸する事が出來た。かくて生命の川なる宗教は流れ流れて今日に及んで居る。

第十九章　信神の意義

宗教の學理的研究は、尙ほ他に諸の範圍を餘して居る。而も其等の問題を悉く闡明することは、本書の任とする所でない。吾等は自已の前に置かれたる範圍に於て、既に殆ど吾等の任務を果たしたるが故に、此の研究によつて得たる信神の意義を述ぶることを以て、吾等の最後の役目を終るものである。

吾等の神は、宇宙に超在する藝術家、または裁判官でない。宇宙に內在して、天地人を貫く精神である。一切はこの精神に統一せられて、始めて存在の意義と價値とを生ずるが故に、神は言葉の眞の意義に於ける實在で、在るものは唯だ神のみである。宗教は此實在を自我の上に實現せんとする要求に根ざして居る。吾等の心の奧の奧から湧出でゝ、徐ろに全我を潤ほし去る此至深の要求に於てのみ、宗教は永遠の根柢を有し得る。これ以外に求め得たる宗教の根柢、從つて信神の根據は決して完全なものでない。動かせば動かし得る土臺である。玆に吾等はヲルテールの例を擧げ得る。

彼は英國思想を佛蘭西に輸入して、佛國啓蒙時代の新思潮を誘致した點に於て、佛蘭西の思想史上に主要なる旨趣を有して居る。初めヲルテールは、調和あり統一ある此善且美なる自然は、必ずや一定の目的に從ひ、意匠的に造られたものでなければならぬ、而して自然を作つたその靈智的存在者が卽ち神であると考へて居た。然るに自然界に於ける異常の出來事、人生に於ける種々の缺陷は次第に彼を懷疑に陷しめ、殊に彼の有名なリスボン府の大地震で慘い目に遭つてから、彼の思想は全く厭世的悲觀的になつた。彼は世界に禍惡の存在する以上、全能を以て神に許す事が出來ぬ、假令神は存在するにしても、之と共に一方には其活動を妨ぐる他の原理卽ち物質があると主張して、神の絕對性無限性を疑ふやうになつた。かくて彼は其傑作カンデイツトの主人公カンデイツトをして、こんな世界が最善の世界だと云ふなら、自餘の世界は如何なだらうと言はしめて居る。神の存在は、目的論的に證明し盡す事が出來ぬ。自然界に行はるゝ調和統一の上に築き上げた信神は、地震に會へば直ちに潰れる信神である。されば ヲルテールの思想信仰が、斯くの如く變つて來たのを見て、ルツソーが彼に與へた手紙がある。其中にルツソーは、信仰の基礎が感情の要求に在る事を主張し、自分は君の如く自然界の事物が盡く善なる故に神を信ずるのでない、神を信ずるからこそ一切の事物に何等かの善を認めずに居れなくなると書いて居る。吾等はルツソーの如く、信仰の基

礎を偏へに感情に置く事は出來ぬ。併しこの天才者が、いみじくも道破したる如く、信仰の基礎を外界に求める事は出來ぬ。吾等は神の信仰を、全心の直接なる要求より湧出づるものと見ねばならぬ。此要求に本づく信仰ありて、始めて吾等は自然と人生とを善美と觀じ得るのである。

サー・オリヴー・ロツヂが、神の人性、人の神性、これが基督教の啓示の神髓であると言つたのは吾等に取りて力ある福音である。我神に居り神我に居ればこそ宗教は意義を生じて來る。凡夫は佛であり、佛は凡夫である。若し吾等と神との間に同一性がないとすれば、神人の關係は形式的外部的のものに過ぎぬ。かゝる關係は、破れば破り得る關係である。吾等の外に在る神や佛は、如何に偉大であつても、如何に壯嚴を極めても、內部の生活に對しては無權威である。吾等は何時でも謀反の旗を翻へして、之と相絕つ事が出來る。道の須臾も離る可からず、離る可きは道に非ざる所以は、部分たる吾等は、全體たる神に統一せらるゝに非ずば、竟に存在の意義を失ふ爲である。冷かなる言葉を以て言表はせば、神人の關係は全體と部分との關係に外ならぬ。部分は全體に對して始めて意義あり、且其存在理由を有し得ると共に、一々の部分は全體を表現する。從つて部分より離して全體を考へる事は出來ぬと同時に、部分が直ちに全體でもない。神と人との關係に就て之を觀れば、神は人を離れて存在するのではない、而も人が直ちに神ではない、神は人に現はれ、人は神を

現はしつゝあるのである。吾等の神は、萬物に於て自己を顯現し、而も萬物を統一し行く心靈であり、生命である。

神を統一者と見る事は、ヘーグル派の思想に於て最も明かに現はれて居る。エドワード・ケヤードは、宗教は教人生の統一原理であると言つて居る。氏に從へば、吾等の意識を劃する三つの觀念があつて、その第一は客觀てふ觀念である。客觀とは吾人を圍む自然界で、同一時間同一空間內に、因果關係に由りて結ばれたる一大系統である。その第二は主觀てふ觀念で、客觀系統と嚴然たる對立をなす自我系統である。主觀に對する時は、客觀界の一切の事物は統一せられたる單一の世界として、客觀に對する時は、主觀內の一切の經驗は統一せられたる單一の自我として、玆に兩者は差別界の根本的對立をなして居る。然るに此兩者は、一方に於て對立すると同時に、他方に於ては必然に聯關して居つて、一は他を俟ちて始めて存在する事が出來る。客觀は、之を統一せる自我の中に取入れて觀られたる時に始めて領會せられ、主觀は之を客觀界に投出して實現せられた時に始めて領會せられるのである。第三の觀念は、自我と非我とを對立させる時に、己に豫想せらるゝ統一てふ觀念で、これが卽ち神てふ觀念である。客觀と主觀とは、互に對立する事によりて存在の意義を有する故に、兩者は反對せるものでなければならぬ。然るに主觀は客觀を待ち、客觀は主觀を

待ちて存在し得るが故に、兩者は一致せるものと云はねばならぬ。かく兩者が同時に反對し且一致するのは、兩者の上に第三者が在つて之を統一し、且兩者に於て自己を實現しつゝあるのであると考へねばならぬ。此潛在せる統一者が卽ち神である。主觀客觀は、始めより神てふ觀念を豫想して起り、且常に之を目的として居るものである。アリストテレースが自然の順序では最初に位するものが、發生の順序では最後に來ると言へる如く、主觀は客觀に先ち、統一卽神は更に主觀客觀に先ちて存するけれど、意識せらるゝ順序は反對で、始めた客觀、次に主觀、最後に統一卽神てふ觀念が來る。併し意識するとせざるとに論なく、此三者は始めより共存して居るものである。スペンサーは、無限卽神は、主觀客觀を超絕せる絕對的統一で、名狀し難き漠然たるものである。そは何物をも拒まざるが故に何物をも包容せぬ。この無制約なる實在は、一切の知覺並に思想の豫想となつて居るけれど、知るべからざるものであると言つて居る。こはスペンサーが、主觀と客觀卽精神と自然とを、全く異なれる兩意識とした爲に生じた結論である。併し繰返して言ふ如く、此兩者は無關係のものでない。吾等の知的活動は、自然を精神に反照する事で、吾等の實踐的活動は、精神を自然に實現し行く事である。兩者が斯く相伴ふ以上は、其中に豫想せられたる統一も、亦常に相待ちて考へる事が出來る。否、主客を統一する神に達して、始めて主客兩觀の眞意義をも知る事が

出來る。されば吾等が主觀と客觀とを對立せしめ、又此兩者と神とを對立せしむる間は、眞理を領會する事が出來ぬ。一切を神の中に見る時、卽ち萬物を統一の見地より見て、一切は神の表現であると見る時、始めて眞理を知り得るのである。三者はかくの如く密接不離の關係あるが故に、主觀を良く知る事が、やがて客觀を良く知る事である。客觀を良く知る事が、やがて主觀を良く知る事である。而して主客兩觀に良く知る事が、卽ち神を善く知る事である。故に無限と有限とを懸隔せるものとするスペンサーの考は誤りである。有限を善く知る事が、取りも直さず無限を良く知る事になる。成程吾等は完全に神を知り得ぬ、何となれば完全に有限を知り得ぬからである。併し全然神を知り得ぬと云ふのは、何物をも知り得ぬと云ふ事になる。吾等は主觀客觀を知り得た丈け、それ丈け、神を知つて居るのである。されば吾等の神に關する知識は、世 並自己に關する知識と相伴ひて發達して居る。されば神を知らぬと云ふのは、知識の中に潛在せる統一を自覺せぬと云ふ意味か、又は統一を現實の生活の上に滿足に實現し得ぬと云ふ意味か、孰れかの一つでなければならぬ。要するに神てふ觀念は、吾等の知識の始めであり、且終りである。從つて理性的生類は總て宗教的生類である。

以上はケヤリードの說の大體である。多くの反對者があるけれど、吾等は或る制約の下に、此說明

は正しきものと考へる。但し神の知識と云ふ事を、抽象的知識の意味に解してはならぬ。然らずんば神は單に理性內の死觀念となつて了ふ。玆に知識と云ふは、實行によりて自己の上に其眞意義を明發揮する事である。されば知ると云ふは、體達する、體得する、又は色讀すると云ふ意味である。從つて神は知識の終始をなすと同時に、行爲の終始をなして居る。かく考へる事によりて、吾等は眞卽ち實在の觀念と、善の觀念とを一致させる事が出來る。ドンキホーテとハムレツトとが、人類の二つの根本的典型である如く、知識と情意とは、人心の二つの根本的作用である。されど此二つは、決して離れて存在し得るものでない、また離れた儘で滿足し得べきものでない。近世に於て知識の方面が急激に進步して、俄かに複雜の度を加へた爲に、兩者の統一は困難となり、實踐の方面と知識の方面との間に、深き溝壑を生ずる樣になつた。之は決して健全なる狀態ではない。兩者が相離れて存在する間は、若くは唯だ其一を採る間は、吾等の心は決して滿足を得られぬ。情意だけに依れば、ドンキホーテの樣に、風車を化物と見て喧嘩せねばならぬ。知識丈けに依れば、ハムレツトの樣に、親の仇を打ち損ぜねばならぬ。されば吾等の活動に理想を與へ、吾等の知識に生命を與へん爲に、知識と情意とは統一せられねばならぬ。この生活の完全なる統一を求むる心が、取も直さず菩提心である。吾等が至極の一大事は、飽迄も要求を徹底せしむるに在る。求めに息む事な

く、強いて自ら賊ふ事なくば、吾等は究竟して成道する事が出來る。孟子は心を盡す者は性を知り、性を知る者は天を知ると言つて、盡心と事天を相卽して居る。神を求むる事は、自己に具はれる者を開發し行く事である。神を信ずるは人性を信ずる事である。ソクラテースは其死に先ちて、人々よ、諸君は一切を失ふも尙幸福たる事が出來る、たゞ人性に對する美はしき信仰を失ふ勿れと敎へた。吾等の安心とは、自己の中に無限性を認め、その開發の疑なきに安んずる事である。されば神に至る唯一の道は、自己に忠實に活くる事に外ならぬ。求めよさらば與へられむとの約束は、天地の間に自己を投出し、自己の中に天地を攝しつゝ、堂々の歩武を進め行けば、必ず神に到り得べしとの確信を吾等に與へる。併し乍ら天國は劍の影に在る。微妙なる繪畫も、鑑賞の目を持たぬ人には反故紙と擇ばぬ。劉喨たる音樂も、鑑賞の耳を持たぬ人には蛙鳴蟬噪である。總じては全體を貫き、分れては一々の音、一々の筆に動いて居る作者の精神を領會する事によりて、藝術の極意を味ひ得る如く、宇宙の眞相、人生の極意は、潛んでは天地人を統べ、出でゝは一々の相に自らを顯現する神を認める事によりて、始めて明かにする事が出來る。こゝに達するまでには金剛の意志を振作して飽くまでも努力せねばならぬ。吾等はこの嚴肅なる、而も希望に充ちたる生活の戰鬪に從はねばならぬ。何物も價を拂はずして得る事は出來ぬ、最も貴き物を得るためには吾等は生命をも賭さねばなら

ぬ。スピノザがエチカを結べる一句は、彼れの名と共に永遠に不朽なる眞理である。

Alles Erhabene aber ist ebenso schwierig, wie selten.

12431

大正拾年九月五日印刷
大正拾年九月十一日發行

定價金壹圓

編輯者　大川周明

發行者　久保勘三郎
東京市小石川區小日向臺町一ノ四九

印刷者　戸田耕司
東京市麹町區平河町五丁目二番地

印刷所　戸田印刷所
東京市麹町區平河町五丁目一番地

發行所　東京刊行社
東京市小石川區小日向臺町一ノ四九
電話小石川五四二八番
振替口座東京三九四三八番

390
8

終